

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：28002

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K11925

研究課題名(和文) 看護教育におけるインシビリティー (incivility) 尺度の開発

研究課題名(英文) Development of incivility scale in nursing education

研究代表者

金城 芳秀 (Kinjo, Yoshihide)

沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・教授

研究者番号：40291140

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：無意識であるうと意識的であるうと、インシビリティーは看護教育における健全な学習プロセスを妨げる可能性がある。わが国で最初の報告となった本研究は、学生が学習者と教育者の相互関係の中断または中断を引き起こす可能性のある状況からインシビリティーを認識することを示唆した(金城ら, 2019)。この知見とこれまでのインシビリティー尺度研究から、パイロット版インシビリティー尺度の質問紙を作成した。このパイロット版は、一定の信頼性と妥当性を示しており、したがってインシビリティー研究に実用できる内容である。現在進行中の研究、教員が認識する学生のインシビリティーをふまえ、本インシビリティー尺度の質問紙を改訂すべきと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

わが国の教育学習環境において、国内では初めて、看護学生が認識する学生間、学生と教員間のインシビリティーとその測定尺度を報告した。礼節や相互尊重の欠如と考えられるインシビリティーは、看護教育に限らず、さまざまな職場環境に少なからず存在すると考える。とくに看護職場においては、生産性の低下、メンタルヘルスの不調、離職など、悪影響が報告されている。本研究はわが国の看護教育において取り組むべき課題、すなわちインシビリティーを減らし、シビリティーを育む教育の必要性を示す貴重な資料であり、学術的にも社会的にも意義がある。今後、看護学生から看護専門職者へのトランジションを視野に入れた研究の展開も期待できる。

研究成果の概要(英文)：Incivility - whether unconscious or conscious - could impede sound learning process in nursing education. Our study, the first article of incivility in nursing education in Japan, suggests the students perceive incivility in situations that possibly cause discontinuation or interruption of the mutual relationship between learners and educators (Kinjo et al., 2019). Based on this finding and previous incivility scale studies, we have developed the incivility questionnaire as a pilot measure of incivility. This pilot version demonstrates certain reliability and validity; therefore, it is eligible for practical application to incivility research. Our incivility questionnaire should be revised along with our ongoing study on students' incivility behaviors perceived by faculty members.

研究分野：看護教育

キーワード：インシビリティー シビリティー 看護教育 看護学生

看護教育におけるインシビリティ (incivility) 尺度の開発

1 . 研究開始当初の背景

これまで看護職者間にみられる lateral violence、ときには bullying とよばれ、incivility と表現される望ましくない言動が指摘されてきた。これに伴い、病院・職場環境における望ましくない言動の測定尺度の開発研究が進展してきた (Nurse Workplace Behavior Scale (DeMarco et al, 2008)、Bullying Inventory for the Nursing Workplace (Hutchinson et al, 2008)、Nursing Incivility scale (Guidroz et al, 2010) など)。しかし、望ましくない言動の内容にはばらつきや重なりがあり、原因論も明らかではないと指摘されている (Roberts, 2015)。これら望ましくない言動を減らすことができれば、看護師の雇用が促進され、看護師の職務満足度が上がり、離職予防につながり、ひいては患者の安全性が高まると考えられてきた。

わが国の産業衛生分野では、日本語版いじめ尺度 (Negative Acts Questionnaire-Revised) の信頼性・妥当性の研究がみられ (Tsuno et al., 2010)、さらに職場の incivility と労働者の健康・医療安全リスクに関するコホート研究が行われている (Tsuno et al., 2017)。

一方、看護教育における技術演習や臨地実習では、学生が重圧 (academic pressure) を感じていることについて、教員の認識が不足していると指摘された (Lasiter et al, 2012)。例えば、学生が認識する「最悪の体験」には、他者がいる前で激しく批判されること、馬鹿にされること、軽視されること、自分のことを他者に漏らされることなどがあげられている。たとえ無意識であったとしても、教育的指導という認識での教員の言動により、学生は深く傷つき、教員への信頼を失っていると思われる。学生側にみられるインシビリティには、授業態度の悪さがあり、例えば、授業中の居眠り、教科と関係のない私語やパソコンの使用、教科書も持たずに受講などがある。

ここ 10 年あまりの看護系英文雑誌における研究成果から、「礼節と相互尊重を欠く言動」と考えられるインシビリティは、無意識的であれ、意識的であれ、看護教育上の学習環境を弱体化し、学生間、学生・教職員間の無関心を引き起こす重要な課題と認識されている (Gallo, 2012)。しかし、わが国では、インシビリティに関する研究データがほとんど見当たらない。

2 . 研究の目的

インシビリティに対する認識を高め、これを減らす行動を起こすには、学生あるいは教員側のどんな言動がインシビリティに関係するか、看護教育機関における解決すべき課題と考える。看護教育で抑圧が掛かりやすい状況 / 掛けやすい状況 (Clark, 2008) を学生や教員から情報収集・分析することにより、教育環境からインシビリティを減らすための示唆を得ることができ、シビリティな教育学習環境を構築する上でも重要と考えた。そこで、わが国では馴染みのない概念であるが、インシビリティ尺度を開発することを本研究の目的とした。

3 . 研究の方法

3.1. 研究期間

2016 年度から 2019 年度 (1 年延長により 2020 年 3 月まで) までとした。研究代表者の所属

大学の倫理審査委員会から研究計画の承認を得た後で、3 大学でのグループインタビューを用いた尺度の構成概念の構築（質的データ分析）と、これに続く質問紙調査による構成尺度の統計学的検証（量的データ分析）を行った。

3.2. インシビリティ尺度（パイロット版）の作成

グループインタビューの結果と、先行研究の測定尺度を参考に、インシビリティの評価項目を選定した。学生の言動は 18 項目、教員の言動は 24 項目とし、各項目について 5 段階で評価した。なお、順序尺度を間隔尺度と見なすことができる最小の選択肢数が 5 とされている。

このパイロット版の調査は、A 大学看護学部 4 年生 40 名から協力を得て、信頼性(内的整合性)と構成概念妥当性を評価した。内的整合性の基準としてはクロンバックの信頼性係数と、折半法による相関係数および信頼係数を、構成概念妥当性には因子分析(最尤法・斜交回転)を用いた。基準関連妥当性の評価には、学生自身または周囲の学生による不適切な言動の頻度(5 段階)とインシビリティの評価項目(5 段階評価)の合計点の相関係数を用いた。

3.3. 倫理的配慮

研究協力の対象者の自由意思によった。説明文書には、研究者の連絡先、研究目的と方法、研究に協力しないことで不利益を被ることはないこと、個人が特定されることはないこと、研究目的以外に使用されることはないことを明示した。加えて、研究期間中ならびに研究終了後も 10 年間、適切に関連資料・データを保管した上で破棄することを保証した。なお、本研究は沖縄県立看護大学研究倫理審査委員会の承認(第 16017 号)を得て実施した。

4. 研究成果

4.1. 学生が認識するシビリティとインシビリティ

看護学部 4 年生 5 人を対象とした 3 つのフォーカス・グループ(計 15 人)から、国内では初めて、学生が認識するシビリティとインシビリティを報告した。本研究から得られた示唆は、「学生は自らの成長を伴う教育学習環境の構造と過程から教員のシビリティを認識し、学生と教員の相互の関わりの中止あるいは中断の原因となる状況からインシビリティを認識する」である(金城ら, 2019)。

4.2. インシビリティ尺度の開発

今回作成した調査票では、以下の(1)～(4)を設定し、各質問項目は 5 段階の順序尺度の選択肢とした。言動の頻度は、「まったくない」から「よくある」、認識を問う場合は、「非常に思う」から「全く思わない」とした。

- (1) 学生から見た自分及び他の学生のインシビリティな言動の頻度(自分の言動 18 項目、他の学生の言動 14 項目)。
- (2) 学生から見た教員のインシビリティな言動の頻度(17 項目)
- (3) 学生から見た学生の言動についてのインシビリティの認識(18 項目)
- (4) 学生から見た教員の言動についてのインシビリティの認識(24 項目)

4.2.1. 学生による学生のインシビリティ評価

(1) 信頼性の確認

クロンバックの信頼性係数は 0.860~0.906、折半法による相関係数は 0.600~0.675 と十分な信頼性が得られた。

(2) 妥当性の検討

内的妥当性については、作成者以外のインシビリティの研究者数名に質問項目を提示して、問題ないことを確認した。学生のインシビリティ評価のための基準関連妥当性については、尺度の得点と自身の言動の実施についての得点との相関係数が-0.492 と比較的高い負の値が得られ、ある程度の基準関連妥当性の存在が認められた。また、質問内容の構成概念を明らかにするために因子分析を行い、最尤法により最適とされた 2 因子モデルを採択した。このモデルでは、第 1 因子は学生の授業態度に関連した因子、第 2 因子は学生の試験に関連した因子であった。負荷量が大きかった項目は、第 1 因子では、「授業中に他の科目の学習をする」、「授業中に授業内容に関係のない私語を交わす」、「授業中に居眠りをする」であり、第 2 因子では、「行われる予定がなかった再試験の実施を要求する」、「試験時間の延長を要求する」であった。

4.2.2. 学生による教員のインシビリティ評価

(1) 信頼性の確認

Cronbach の信頼性係数は 0.860 と高い値が得られ、折半法による相関係数は 0.675、Guttman の信頼係数は 0.806 といずれも高い値であり、十分な内的整合性が認められた。

(2) 妥当性の検討

内的妥当性については、学生の評価同様、問題ないことを確認した。構成概念の因子分析では、最尤法により最適とされた 2 因子モデルを採択した。第 1 因子は教員の学生に対する態度に関連した因子、第 2 因子は教員の授業に対する態度に関連した因子であった。負荷量が大きい項目は、第 1 因子では、「教員が他の学生の前で看護師に向いていないと言う」、「不公平なやり方で成績をつける」、「相手に差別的なことを言う」であり、第 2 因子では、「シラバスに記載されていない内容を講義する」、「授業の邪魔になっている学生の私語を放置する」であった。

4.3. 今後の課題

本研究におけるインシビリティとシビリティは、講義、演習、臨地実習および卒業論文指導における場面や状況から得られた。これまでインシビリティは非言語的内容から身体的暴力まで、スペクトラム（連続性）で捉えられてきた（Clark et al, 2015）。本研究の開始後、2018 年に PubMed MeSH (www.ncbi.nlm.nih.gov/mesh) で示されたインシビリティは、「相互尊重の規範に違反して、相手を傷つけるという曖昧な意図を持った低強度の逸脱行動」である。その後も同 MeSH にシビリティの定義は見当たらない。本研究結果から得られたインシビリティは、非言語的内容と身体的暴力は含まれず、MeSH の定義に近い内容であった。わが国では、インシ

ビリティもシビリティも馴染みのない概念であるが、今後の研究の蓄積により、その重要性が高まると考える。

今回作成したインシビリティ尺度は一定の信頼性・妥当性を有し、実用に足る内容であることが確認できた。さらに本尺度の完成度を高めるために、教員が認識する学生のインシビリティという側面から追加すべき項目があるか、現在進行中の継続研究をふまえて、改訂すべきと考える。

文献

Clark C.M. (2008): The dance of incivility in nursing education as described by nursing faculty and students. *Adv Nurs Sci*. 31, E37-54.

Clark C.M., Barbosa-Leiker C., Gill L.M., et al. (2015): Revision and psychometric testing of the Incivility in Nursing Education (INE) survey: introducing the INE-R. *J Nurs Educ*. 54(6), 306-15.

DeMarco R., Roberts S.J., Norris A., et al. (2008): The development of the Nurse Workplace Scale: self-advocating behaviors and beliefs in the professional workplace. *J Prof Nurs*. 24(5), 296-301.

Gallo, V. J. (2012): Incivility in nursing education: a review of the literature, *Teaching and Learning in Nursing*, 7, 62-66.

Guidroz A.M., Burnfield-Geimer J.L., Clark O., et al. (2010): The nursing incivility scale: development and validation of an occupation-specific measure. *J Nurs Meas*. 18(3), 176-200.

Hutchinson M., Wilkes L., Vickers M., et al. (2008): The development and validation of a bullying inventory for the nursing workplace. *Nurse Res*. 15(2), 19-29.

Lasiter, S., Marchiondo, L., Marchiondo, K. (2012): Student narratives of faculty incivility, *Nurs. Outlook*, 60(3), 121-126.

Roberts S.J. (2015): Lateral violence in nursing: a review of the past three decades. *Nurs Sci Q*. 28(1), 36-41.

Tsuno K., Kawakami N., Inoue A., et al. (2010): Measuring workplace bullying: reliability and validity of the Japanese version of the negative acts questionnaire. *J Occup Health* 52(4), 216-26.

Tsuno K., Kawakami N., Shimazu A., et al. (2017): Workplace incivility in Japan: reliability and validity of the Japanese version of the modified work incivility scale. *J Occup Health* 59, 237-46.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 金城芳秀、宮里暁乃、佐伯圭一郎、西川浩昭、大城真理子、李 廷秀	4. 巻 39
2. 論文標題 看護系大学生が認識する教育学習環境のシビリティとインシビリティ：フォーカス・グループインタビューデータの質的分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本看護科学会誌	6. 最初と最後の頁 165-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5630/jans.39.165	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 金城芳秀、西川浩昭、佐伯圭一郎、李 廷秀、宮里暁乃、大城真理子.
2. 発表標題 学生による教員のインシビリティ評価尺度開発の試み
3. 学会等名 日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西川浩昭、金城芳秀、佐伯圭一郎、李 廷秀、宮里暁乃、大城真理子.
2. 発表標題 学生による学生のインシビリティ評価尺度開発の試み
3. 学会等名 日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西川浩昭、金城芳秀、佐伯圭一郎、李 廷秀、宮里暁乃、大城真理子.
2. 発表標題 インシビリティ評価用調査票作成の試み 学生の認識に焦点を当てて
3. 学会等名 日本健康学会総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐伯圭一郎、西川浩昭、李 廷秀、宮里暁乃、大城真理子、金城芳秀
2. 発表標題 看護学生の考える教員のcivility - 計量テキスト分析による検討 -
3. 学会等名 第83回日本健康学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金城芳秀、宮里暁乃、佐伯圭一郎、西川浩昭、大城真理子、李 廷秀
2. 発表標題 看護学生を対象としたグループインタビューにおける教員のincivilityとcivility(その1)
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮里暁乃、金城芳秀、佐伯圭一郎、西川浩昭、大城真理子、李 廷秀
2. 発表標題 看護学生を対象としたグループインタビューにおける教員のincivilityとcivility(その2)
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金城芳秀、
2. 発表標題 教育環境におけるincivilityとcivility
3. 学会等名 第82回日本健康学会 (学会長講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金城芳秀、宮里暁乃、大城真理子、佐伯圭一郎、西川浩昭、李 廷秀
2. 発表標題 看護学生が認識する教員のcivilityとincivility
3. 学会等名 第82回日本健康学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金城芳秀、佐伯圭一郎、西川浩昭、宮里暁乃、大城真理子
2. 発表標題 看護教育環境における学生，教員のincivilityの文献的範囲
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金城芳秀
2. 発表標題 看護教育に求められるシビリティ
3. 学会等名 名桜大学人間健康学部看護学科FD研修会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	西川 浩昭 (Nishikawa Hiroaki) (30208160)	聖霊クリストファー大学・看護学部・教授 (33804)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	佐伯 圭一郎 (Saiki Keiichiro) (50215521)	大分県立看護科学大学・看護学部・教授 (27501)	
研究 分担者	李 廷秀 (Lee Jung Su) (60292728)	東京大学・医学部・准教授 (12601)	
研究 協力者	宮里 暁乃 (Miyasato Akino)		
研究 協力者	大城 真理子 (Oshiro Mariko)		
研究 協力者	村上 満子 (Murakami Mitsuko)		